

(2) 水害をふせぐ

・あぶくま川の河川工事の歴史

玉川村の西側を南から北に向かって、大きなあぶくま川が流れています。昔の人々は、このあぶくま川の水害を防ぐために大変苦勞してきました。

① 江戸時代の小高村の工事の記録をもとに、その様子を調べてみましょう。

あぶくま川にのぞむこの地方の沿岸の村々は、曲がりくねってあばれまわる大きな川をかかえているだけに、出水のたびに大きな被害を受けていました。

特に、小高村はたび重なる被害を受けて苦勞していました。他の大きな川は、幕府が大名に工事をさせていましたが、このあぶくま川は、元禄の頃までは地元の藩による工事が行われてきました。またその間にも、小高村の代々の名主の首藤家が、私財を投じながら村普請を行ってきました。

しかし、たびたびの大洪水で大きな被害が出て間に合わなくなり、幕府直かつの大きな普請が行われるようになりました。これには、近くの村ばかりでなく、幕府直かつの蓬田村や小平村などのように遠くの村からも、たくさんの農民が集められました。

各村から集まってきた人々は、工事場所と日数が割り当てられ、蓑・笠・鉈・鍬・鎌などの道具を持ち寄り、空俵・縄・柴木などの材料も自分たちで持って来なければなりません。弁当も、もちろん自分持ちでした。特に遠くの村々の人たちは、前夜のうちに集合し、夜通し歩いて、朝六ツ（午前6時）までに工事現場に到着しなければならず、農民にとってはたいへんな負担でした。

（玉川村史）

② あぶくま川の改修工事につくした首藤敬助

小高村の6代目名主になった首藤敬助は、父の意志を受けついで、村民のためにあぶくま川の改修工事や、田畑の保墾管理や幼児養育などに熱心に取り組みました。しかも、村としての費用が足りなくなると、それまでに貯えてきた自分の財産を投げうってまで、それらの事業をなしたげたのです。

明治30年6月3日、首藤敬助の功績をたたえ、後世に伝えるため、小高の大雷神社境内に、頌徳碑が建てられました。

